

2022年7月17日 礼拝メッセージ

「偽りの夢 真実の夢」

牛田匡牧師

聖書 エレミヤ書 23章16-32節

今回の聖書のお話は、ヘブライ語聖書の中から、預言者エレミヤの言葉でした。「預言者」というのは、神の言葉、ご神託を人々に告げる存在ですが、ヘブライ語聖書の中でも、「主はこう言われる」や「主の仰せ」という言葉と共に、人々に様々なことを語り伝えています。その「預言者(ナービー)」というヘブライ語の単語の語源は、「(神によって)呼ばれた者」「(神の)代弁者」を意味すると考えられています。もちろん、そのような存在は、古代イスラエル社会だけではなく、東アジアを含めて、広く世界中にいたと考えられますし、聖書の中にも古代イスラエルの人々の神とは異なる、異教の神々に仕える預言者たちも登場しています(例えば、列王記上 18 章など)。

預言者エレミヤが活動した時代は、紀元前 7 世紀から 6 世紀にかけてで、場所は南ユダ王国でした。その時代、古代イスラエル王国は、南北 2 つに分裂していて、それぞれにアッシリアの属国となっていました。しかし、エレミヤが登場するおよそ 100 年前に、北イスラエル王国は、隣国エジプトを頼って、宗主国であったアッシリアへの貢ぎ物を拒んだために、アッシリアに滅ぼされてしまいました。その後、アッシリアに代わってバビロニアが勢力を伸ばして来て、エジプトや南ユダ王国へと迫って来ました。実際の歴史としては、バビロニアがエジプトを征服し、南ユダ王国もバビロニアの属国となり、多くの人々がバビロンに移送されていく「バビロン捕囚」へと至るわけです。そのような時代の大きな変化の狭間で、強大な軍事力を持つ大国に囲まれながら、どこに行けば自分たちの国は生き残ることが出来るのか、右往左往していた南ユダ王国の人々がいました。

そのような時代の中で、エレミヤはエジプトの援助を頼ろうとする王の前に立ち、むしろ「バビロニアに服従することが、ユダ王国が生き延びる道であり、そこに神の意志がある」ということを訴えました。しかし、王とその側近たちの意見と真っ向から反対するエレミヤは、国家に対する反逆と見なされて、しばしば命を狙われました(エレミヤ 26:8-9)。今回の 23 章 16 節からの箇所には、王の周りにいたと思われる偽の預言者たち、偽りを預言する預言者たちを厳しく糾弾するエレミヤの預言の言葉が記されています。

偽りの預言、それは主の口から出たものではなく、人間である預言者自身の心から出たものにすぎない(23:16)。そして彼らは人々に向かって「平和があなたがたに臨むと、主が語られた」と言い、「あなた方に災いは来ない」と言ったそうです(17)。このような優しい言葉と、「もうすぐ苦難が来る。裁きが来る」という厳しい言葉とが示されたら、人々はどちらを喜んで受け入れるでしょうか。その結果は歴史が証明している所です。そしてまたエレミヤに限らず、多くの預言者たちは、人々に「目を覚まして、命の神に立ち返りなさい」「生き方の方向転換をなさい」

と訴えましたが、そのような厳しい預言の故に、彼らは人々から激しい反対、弾圧、迫害に見舞われました。

今、聖書を読んでいる私たちは、ここに書かれている物語から 2500 年以上の時代を経て、歴史を知った上で、このお話を読んでいますから、その時代に人々から受け入れられなかったエレミヤの方が、真実の預言をしていたという理解の上で、このお話を読んでしまいます。しかし、もしも自分がこの時代に、当事者として生きていたら、「このままでは滅ぼされてしまう」という厳しいことをいうエレミヤの預言と、「大丈夫、大丈夫。神様が一緒にいてくれるから、私たちには平和があります。災いは来ません」という優しい言葉を告げてくれる預言者たちと、どちらの言葉に耳を傾けるでしょうか。どちらの預言に心惹かれ、心を動かされ、そちらの方向で歩いていこうと決意するでしょうか……。

「何が偽りの預言で、真実の預言か」、どうやってその両者を見分けたらよいか、ということについて、『申命記』18 章 21-22 節には、次のように書かれています。

<sup>21</sup> もしあなたが心の中で、『私たちは、その言葉が主の語られた言葉ではないことを、どのように知りえようか』と考える場合、<sup>22</sup> その預言者が主の名によって語っていても、その言葉が起こらず、実現しないならば、それは主が語られた言葉ではない。預言者が傲慢さのゆえに語ったもので、恐れることはない。つまり、実際に語られたことが実現したら、それは真実の預言であり、実現しなかったら偽りの預言であることが判明する。結果がどちらであれ、結果を見てみないと分からないというわけです。これでは「判別の基準にならない」とも言えますが、しかし「これしか判別の基準にはなり得ない」とも言えるのではないのでしょうか。

ヘブライ語では「言葉(ダーバル)」という単語は、同時に「出来事」という意味も持っています。そしてヘブライ語聖書に記されている数々の物語は、その物語に記されている多くの出来事を通して、それらの歴史の中に確かに神が存在し、働かれているということを表しています……。現実の世界では、右と左、どちらに行けば正解なのかが分からないことが多くあります。また「こっちの方が正しそうだ」とか、「こっちに進んだらまずいことになりそうだ」と思いながらも、誤った方向に歩みを進めてしまう、ということも少なくないようにも思います。そして結果が出てから「ああ、やっぱりやらなきゃよかった。間違ってた」と気付く。そんなこともあるのではないのでしょうか。「偽りの預言」と「真実の預言」、「偽りの夢」と「真実の夢」……。聖書の時代から何千年も経ち、科学技術も医学も随分と発展した今日ですが、それでも、私たちは日々に、右か左か、どちらが正しい道なのか。どちらが神様の示された道なのか、御心に適った道なのかを迷うことが多くあります。そんな時「平和があなたがたに臨む。災いは来ない」と言われると、安心して、そちらに行きたくなりますが、果たしてその言葉は真実なのでしょうか。

7 月 8 日に安倍晋三元首相が、演説中に狙撃されて亡くなった事件があってから、その容疑者のことがさかんに報道されています。カルト宗教の旧・統一教会(現・世界平和統一家庭連合)によって容疑者の母親が洗脳されて、家庭が破壊され、自身の人生もつぶされてしまったという激しい怨みが、犯行の動機にあった

ようです。自分たちの家族がこんなに悲惨な目に遭っているのは、先祖の霊の崇りのせいだから、先祖の霊を鎮めるために、何かの儀式をしたり、何かを購入したり、また何日間にもわたる修練に参加したりして、それらの度に高額な献金が必要だったのだそうです。一説によると、一億円以上の献金があったそうですが、教団側は「あくまで個人の意思に基づく献金であり、こちらから多額の献金を要求したことはない」と言っているそうですが、今でも多くの人たちが教団に対して、返金を求めて裁判を起こしているということもまた事実です。

そのような報道を見て、「やっぱり宗教は怖い」と思われる人も少なくないかと思います。しかし、神社に行って、お守りやお札を買ったり、お寺に行ってお墓参りや年忌法要をしたりするのも宗教です。確かに「数百円や数千円、せいぜい数万円くらいまでだったら、普通の宗教だけど、そこに数百万円、数千万円をつぎ込んでしまうのは、カルト宗教だ」とも言えなくもないかもしれませんが、事の本質は金額の多い少ないではないような気がします。そもそも「〇〇すれば、こうなるはずだ。こうなるだろう」という考え方自体が、一つの「宗教」なのではないでしょうか。500円や1000円を出して、お守りやお札を買うのは、「このお守りを持っていたら、交通安全や、出産、商売が守られるだろう」ということでしょうし、年忌法要や先祖供養も、それによって今の安泰を願うというものでしょう。それこそ、いわゆる「〇〇教」という名前は付いていませんが、「お金があれば幸せになれるはずだ」というのもまた「宗教」なのではないでしょうか。また「結婚して、子どもがいて、マイホームがあれば、幸せになれる」というのも、「成績のよい学校に行って、大企業に入ったり、官僚になったりしたら、この社会で勝ち組になれる、幸せになれる」というのも、一つの「宗教」だと言えるのではないかと思います。それらは言葉を変えれば、「単なる思い込み」とも言えるかもしれません。確かに「お金がないために不自由で、不幸」ということはあるのですが、「お金がたくさんあっても、幸せではない」ということもまた、よくあることかもしれません。また「有名な大学に行って、有名な大企業に入ったけれども、ちっとも幸せではない」という人もいるのではないのでしょうか。結婚しても離婚する人が多く、また自ら命を絶ってしまう人も多く、成人しても社会に出られず引きこもっている人が多くいるという現実には、それらの「宗教」が告げていた「これらによって、幸せになれる」という約束のお告げが、実は「偽りの預言」、「偽物の夢」だったということを表しているのではないかと感じています。

また同じように、「適正に管理・運用すれば、原子力発電は安全に利用できる」という主張や、「核兵器を持っていれば、平和を実現することができる」という主張も、科学的・国際政治的根拠に基づく客観的事実であるどころか、単なる「絵空事」に過ぎなかった、それこそ「宗教」と同じだったということも明らかになって来ているのではないかと思います。

この世界には、「偽物の宗教」と「真実の宗教」とがある。そして「偽物の宗教」を信じている人、「偽りの預言」を聞き、「偽りの夢」を見ている人は滅びるけれども、「真実の宗教」を信じ、「真実の預言」に耳を傾け、「真実の夢」を見ている人は救われる……。そのような信仰理解、宗教理解自体が、カルトに他ならないの

ではないでしょうか。その問いは、毎週教会に集い、礼拝を守っている私たち自身もまた向けられています。

神はエレミヤの口を通して、次のように語っています。23章 23-24節です。

<sup>23</sup> 私は近くにいる神なのか——主の仰せ。／遠くにいる神ではないのか。

<sup>24</sup> 人がひそかな所に身を隠したなら／私には見えないとでも言うのか

—主の仰せ。／天をも地をも、私は満たしているではないか／—主の仰せ。

王や側近、国民のすぐそばにいて、そこだけで物事を見聞きし、判断するような神なのか。人々が身を隠したら、神の目から逃れられるような神なのか。そうではない。神はまるで遠くに立っているかのように、すべてを見渡し、見通し、全体を把握している存在。そして、創られた天をも地をも満たしている存在だ、と言われていきます。これは『詩編』139編の詩にも通じています。1節から5節です。

<sup>1</sup> 主よ、あなたは私を調べ／私を知っておられる。

<sup>2</sup> あなたは座るのも立つのも知り／遠くから私の思いを理解される。

<sup>3</sup> 旅するのも休むのもあなたは見通し／私の道を知り尽くしておられる。

<sup>4</sup> 私の舌に言葉が上る前に／主よ、あなたは何もかも知っておられる。

<sup>5</sup> 前から後ろからも私を囲み／御手を私の上に置かれる。

「神様はどこにいるのか。神様はどこにでもいる。いや、私たちの方こそが、神様のみ手の中にいるのだ」という詩です。「正しい信仰を持ち、神様の御手の中に生かされていることに気付いていれば、災難に見舞われることはない」などということはありません。私たちの目から見て、たとえどんなに正しい人、立派な人であっても、病気になることもあれば、事故に遭ったり、災害に見舞われたりすることもあります。むしろ、いい人の方にはばかり、苦難なのか試練なのか、しんどいことがたくさん与えられているようにすら感じることもあります。「何故、どうして」と思います。しかし、聖書が告げているのは、「〇〇すれば、こうなるはずだ」「こうなったのは、〇〇しなかったせいだ」という考え方からの脱却、卒業です。言い換えるならば、「どんなに苦難に見えて、試練に見える中であっても、そこでも命の神が隣にいて、共に歩んでくれている」「そこが神様の御手の中」ということです。「偽りの夢」に目を向けることで、その事実から目を逸らすのではなく、神様からの助けを得て、神様と共にあって、今、この時の現実を目を向けて、その現実を受け止めて歩み出そうということなのです。

本日の招きの言葉には、「キリスト・イエスにあっては、割礼の有無は問題ではなく、愛によって働く信仰こそが大事なのです」(ガラテヤ 5:6)とありました。律法に定められた割礼という掟を守っているかどうか、宗教に定められた決まり、「何かをしたか／していないか」が問題なのではない、ただ人を大切にしつつ、信頼して歩みを起こすことこそが、私たちに今日を生きる力を発揮させる、と言われていきます。私たちの目の前には、すぐには正解が分からない課題もあれば、右と左とどちらを選べばよいか分からないこともあります。そのような時も、すぐに答えを出そうとするのではなく、命の神の御心はどこにあるか、イエス様ならどうするかを祈り求めながら、私たちは今日もここから歩み出していきます。